様式第９号（第５条関係）

学位審査結果報告書

学位申請者氏名　白木 光

学位論文題目 Influence of Age on Associations of Occlusal Status and Number of Present Teeth with Dementia in Community-Dwelling Older People in Japan: Cross Sectional Study（日本の地域在住高齢者における咬合状態と現在歯数および認知症との関連に与える年齢の影響：横断研究）

審査委員（主査氏名）　角舘　直樹　　（署名）角舘 直樹

（副査氏名）　福原　正代　　（署名）福原 正代

（副査氏名）　久保田　潤平　　（署名）久保田 潤平

学位審査結果の要旨

認知症は多因子疾患であり、加齢、糖尿病、高血圧、喫煙、肥満、難聴、抑うつ、運動不足、社会的孤立などが危険因子として報告されている。また近年、認知症と口腔内の状況との関連が報告されている。そこで、本研究では地域在住高齢者における咬合状態、現在歯数および年齢が認知症に及ぼす影響について検討することを目的とした。

研究デザインは横断研究であり、2015 年 4 月から 2020 年 11 月まで福岡県豊前市で実施された「在宅訪問口腔ケア事業」から得られたデータを用いた。包含基準は、豊前市在住で 40 歳以上、国民健康保険および後期高齢者医療保険に加入していることとした。その結果、合計 218 人の地域住民がリクルートされた。このうち、65 歳未満（n=2）の者と調査項目の一部（年齢、認知症の診断および口腔関連）が欠損している者（n=20）を除外し、196 名（女性 64%、男性 36%、中央値年齢：84 歳）を解析対象者とした。咬合状態については、対になった天然歯または人工歯の数に基づいて、Functional Tooth Units（FTU）を算出した。認知症については、精神科医または神経内科医による臨床診断に基づいて評価した。統計解析では、認知症罹患の有無を目的変数とし、FTU または現在歯数を説明変数としてロジスティック回帰分析を行った。その後、中央値年齢で層別化したサブグループ分析を行った。また、年齢、性別、教育歴、高血圧・糖尿病の有無、喫煙歴および Mini Nutritional Assessment-Short Form（簡易栄養状態評価）を調整因子として用いた。

ロジスティック回帰分析の結果、FTU が高いほど、有意に認知症に罹患していないことが示された（オッズ比：0.87、95%信頼区間：0.78-0.96、p=0.006）。一方、現在歯数と認知症罹患との間に有意な関連は認められなかった。年齢によるサブグループ分析の結果、84 歳未満において、FTU と認知症罹患との間に有意な関連が認められた（オッズ比：0.82、95%信頼区間：0.68-0.97、p=0.018）。

本研究の結果より、地域在住の高齢者において認知症に関連する口腔内の要因としては現在歯数よりも、人工歯を含めた咬合状態が重要であることが示唆された。また、高齢者の中でも年齢層によりその影響が変化する可能性が示唆された。

公開審査において、申請者に対して主査と２名の副査による諮問が行われ、申請者から概ね適切な回答を得た。以上のことから、審査委員会では本論文が学位論文として価値あるものと判断した。